

氏名	亀岡 京子
職位	COE 研究員
<p>研究概要</p> <p>・医薬品の研究開発プロセスにおける「評価」という機能が果たす役割について考察した。研究開発の流れの中で2つの段階（基礎研究段階および臨床開発段階）から検討している。これは、企業の研究所で有望な化合物を見つけ出してから医薬品が市場に出るまでに、約10年から15年あるいはそれ以上時間がかかる。最初の4～5年は企業内で薬効のある化合物を探索し、数多くの候補化合物から1つに絞り込み、臨床試験が行われるものである。</p> <p>この臨床試験に進む前段階で、化合物をいかに効率的・効果的に探索できるのかを組織的なプロセスの視点で考察したのが、下記「評価スキームの作りこみによる問題解決アプローチ—アルツハイマー型認知症治療薬の研究開発の事例」である。ここでは、問題解決に当たる際に、問題として既に設定された枠組みを超えて、最終的に達成できるような製品が持つべき機能を測定できる指標を設定する意義を述べた。つまり「何をどのように評価すべきか」という視点から捉え直すという評価スキームの構築が、多くの代替案の絞り込みの精緻化につながり、より良い満足解を得るために奏功すると結論づけた。</p> <p>さらに、臨床開発段階では候補化合物は薬として企業の境界を越え、治験薬として医療機関において患者投与されて安全性・有効性が評価されることになる。データの収集・分析には、製薬会社だけではなく臨床試験業務受託期間（CRO）という組織も参加することもある。ここで、候補化合物は病気の治療薬としてさまざまな社会的な立場にいる人びとに関与する存在となる。その中でCROが果たす役割は従来注目されてこなかったが、CROには数多くの製薬会社や数多くの医療機関および医師のやり方、患者の疾病に関する薬理学的な知識などさまざまな知識や情報、さらにはノウハウが集約される。このCROを使いこなすことが実は製薬会社にとって、業務の進め方をより効率化させ、更なる知識の構築や社会的な厚生の向上を促進させることが分かった。このことを論じているのが、下記の「評価業務の外部化の意義」である。</p>	
<p>業績リスト</p> <p><u>論文</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・2009年9月：「評価スキームの作りこみによる問題解決アプローチ — アルツハイマー型認知症治療薬の研究開発の事例」『組織科学』に採択 <p><u>受賞</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・2009年9月：「埋もれた研究成果の意図せざる引継ぎ — 高血圧症治療薬のR&Dプロセスの事例研究」が日本経営学会賞（論文部門） <p><u>報告</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・2009年9月：日本経営学会第83回大会受賞者セッション（於：九州産業大学） ・2010年1月：日本情報経営学会関西西部会報告（於：大阪市立大学梅田サテライト） 	

